

## ダニエル書 - 第五十二番

預言の謎を解き明かす：ダニエルの幻視と諸王国の台頭

Jeff Pippenger

2024-01-16

前回の記事で、ガブリエルが二人の証人に基づいて1844年という年代を確証するために、「終わりの憤り」の結論を示したことを指摘した。ミラーは、ユダ王国に対して下されたレビ記二十六章の「七つの時」を理解していたが、イスラエルの北王国と南王国の双方に及ぶ「七つの時」の裁きの目的と関係を見通すところまでは至らなかった。彼が十九節にある「終わりの憤り」の区別を認識していたかどうかは疑わしいが、「憤り」とは「七つの時」のことであるという一般的な理解は、間違いなく持っていた。最初と最後の憤りに関する光は1856年にパルモニによって封印が解かれたが、1863年に退けられた。それでも「七つの時」に関するミラーのメッセージは、限定的ではあったが正しかった。

ミラーは、ダニエル書8章11節において、異教ローマの小さな角が異教を高く掲げ、あがめたことを認識していなかったであろう。というのも、ミラーにとっては“take away”は、ダニエル書の三箇所すべてで単に「取り去る」ことを意味していたからである。それでも彼のメッセージは、限定的ではあったが、なお正しかった。

ミラー派の人々は、十一節の「聖所」がローマ市にある異教の神殿（パンテオン）を指すことを確かに認識していたが、彼らのメッセージはヘブライ語に基づくものではなかった。ミラーのメッセージは預言の時期に焦点を当てていた。彼らのメッセージが解き明かされた時代の歴史的背景が、アメリカ合衆国を聖書預言の第六の王国と見なすことを妨げ、さらに言えば、教皇権を聖書預言の第五の王国と見なすことも妨げていた。

彼らは自らが生きた歴史状況に強いられて、差し迫ったキリストの再臨を予期し、それに一致するように預言を適用したため、失望を味わった。しかし、彼らのメッセージは正しかった。15~27節でガブリエルが二つの幻の解釈を与えるとき、ミラーの理解は、9~12節に見られる小さな角の文法的性の揺れに表れている諸王国についての、より広い啓示を彼が把握するのを妨げた。ミラー派は、ガブリエルの解釈において、ローマを第四にして最後の地上の王国としてしか見なかった。

そして、私、すなわちダニエルが幻を見てその意味を求めていたとき、見よ、人のような姿が私の前に立っていた。私はウライ川の兩岸の間から人の声を聞いた。その声は呼ばわって言った、「ガブリエルよ、この人にその幻を悟らせよ。」すると彼は私の立っているところに近づいてきた。彼が来ると、私は恐れてひれ伏した。しかし彼は私に言った、「人の子よ、悟れ。この幻は終わりの時に関わるからだ。」彼が私に語っている間、私は地に顔を伏せて深い眠りに陥った。しかし彼は私に触れて、私を起こし立たせた。彼は言った、「見よ、私は憤りの終わりに起こることをあなたに知らせよう。終わりは定められた時にあるからだ。あなたが見た二本の角を持つ雄羊は、メディアとペルシアの王たちである。毛むくじゃらの雄山羊はギリシャの王であり、その目の間にある大きな角は第一の王である。さてその角が折れ、代わって四つが立ったのは、その国民から四つの国が起こるが、その王の力のようにではないということだ。彼

らの国々の末に、背く者どもが満ちるに至るとき、凶悪な顔つきで、難解な語を悟るひとりの王が起こる。彼の力は強くなるが、自分の力によるのではない。彼は驚くべきほど滅ぼし、栄え、企てを行い、そして強い者たちと聖なる民を滅ぼす。また彼は策略によってその手に欺きを栄えさせ、心の中で自らを高くし、平安をもって多くを滅ぼす。彼はまた諸侯の君に立ち向かうが、人手によらずして碎かれる。夕と朝について語られた幻は真実である。それゆえ、この幻を封じておけ。多くの日にわたることだからだ。」私ダニエルは気を失って、幾日か病み臥せた。その後、起き上がって王の務めに当たった。私はその幻に驚き惑ったが、それを理解する者はなかった。ダニエル書 8:15-27.

ウライ川の幻（現在その成就の途上にある）をダニエルが受けたとはいえ、バビロンの歴史において、この幻からは第一の王国が省かれている。第二章と第七章では、それは金の頭や獅子として含まれていたが、バビロンが取り去られ、再び回復されるという預言的な側面が第八章で強調されている。ネブカドネツアルは、「七つの時」のあいだ人々の中から追い払われたとき、ローマ教皇制の致命的な傷を型として示し、同時にツロの淫婦が忘れ去られる象徴的な七十年をも予表した。ダニエル書第八章では、聖書預言の諸王国の中からバビロンは忘れ去られ、幻はメディアとペルシャ（雄羊）から始まり、その後ギリシャ（雄ヤギ）が続く。

アレクサンドロス大王の王国は、アレクサンドロスよりも力の劣る四つの王国へと分裂した。これは、第七章でも四つの翼と四つの頭を持つ豹によって表されていた。四という数は、北・東・南・西によって示されるように、全世界を表す。第八章八節では、天の四方の風に向かって四つの顕著なものが現れた。第七章におけるギリシャの四つの翼は第八章の四つの風と対応し、ギリシャの四つの頭は四つの顕著なものと対応する。四つの頭と四つの顕著なものは、アレクサンドロスの元の王国が分裂して生じた四つの王国を表し、四つの翼と四つの風は、その分割の四つの領域を表す。この点の区別を理解することは重要である。というのも、それは、ローマの第四の王国についてのプロテスタントの伝統的理解に対し、ミラー派が唱えた論拠を示しているからである。

1843年と1850年のパイオニア図表によって示されたハバククの板には、預言的適用を示していない図像がただ一つだけあり、それは四つの頭と顕著なもの、そして四つの翼と風の区別に関わるものである。聖書の預言における第四の王国がローマであるという真理を覆い隠すために、サタンは四つの頭と顕著なもの、そして四つの翼と風の意味が真か偽かをめぐる論争を持ち出した。サタンがそうしたのは、ダニエル書が、幻を確立した一つの明確な象徴があることを明らかに示しているからである。その象徴を立証する証拠の一部は、四つの頭と顕著なもの、そして四つの翼と風の中にある。プロテスタントはこの論争についてサタンの見解を支持し、この論争はミラー派の歴史にとって極めて重要であったため、彼らはその論争を図表に記した。ダニエル書において「chazon」の幻を確立する力は「あなたの民を略奪する者たち」として示されており、プロテスタントはその力を、アンティオコス・エピファネスという名を持つシリア王の長い系譜の一人と同定したが、ミラーはそれをローマと同定した。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル

11:14.

アンティオコス、アレクサンドロスの王国が四つの王国に分裂したのち、そのうちの一つから生じた王朝に属する王の一人であった。ダニエル書8章9節の「小さな角」はアレクサンドロスの王国の後に現れ、同節は、その四つのうちの一つからこの「小さな角」が出てきたと述べている。

そのうちの一つから小さな角が現れ、南と東、そして麗しい地に向かって、きわめて大きくなった。ダニエル書 8:9.

ローマが幻を成就させるのか、それとも弱くてかなり取るに足らないシリアの王が幻を成就させるのかという論争には、小さな角の権力が四つの角の一つから出たのか、四つの風の一つから出たのかという論点も含まれている。だが、これは大した論争ではない。歴史と預言は、ローマがギリシャ帝国の後継ではなく、ローマが新たな勢力であったことを明確に示しているからである。もしローマが第四の王国であったなら、第9節の「そのうちの一つ」は、四つの風または翼の一つでなければならない。もしそれがアンティオコス・エピファネスであるなら、それはシリアの角から出たのである。

ミラー派は、「あなたの民を略奪する者たち」として表されている勢力がキリストに敵対して立ち上がると認識した。

また、彼はその策略によって欺きをその手中で成功させ、心の内で自らを高ぶらせ、平和な時に多くの者を滅ぼす。彼はまた、君たちの君に対して立ち上がるが、人の手によらずに打ち碎かれる。ダニエル書 8:25.

「諸侯の君」はキリストのことであり、アンティオコス・エピファネスはキリストが生まれるよりはるか前に生きていたため、ミラー派はこの事実を1843年の図表で指摘した。その図表には「164」という年が記されていたが、これは実際には聖書に根拠のあるものではなく、ミラーとプロテスタントの神学者たちとの間で争われた第四の王国をめぐる論争の重要性を示すための単なる注記にすぎなかった。図表の「164」という年の横には、次のように書かれていた。「アンティオコス・エピファネスの死。もちろん彼は『諸侯の君』に立ち向かったのではない。『諸侯の君』が生まれる164年前に彼はすでに死んでいたからである。」

今日、アドベンチズムは「あなたの民の略奪者」はアンティオコス・エピファネスであると教えており、背教的なプロテスタントも同様である。これは、「1843年の図表は主の御手によって導かれ、改変してはならない」と靈感によって記録されているという事実にもかかわらずである。ミラー派は、陰しい顔つきの王がローマであることを知っていたので、“chazon”の幻を打ち立てる力を損なう悪魔的な教えに動じることはなかった。聖書は、幻がなければ民は滅びることを明確に示している。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

ソロモンがその節で指し示している「chazon」の幻は、ダニエル書8章13節において、異教と教皇制が聖所と軍勢を踏みにじることを示す幻である。ミラー派にとって、その二つ

の荒廃をもたらす権力は聖書の預言における第四の王国を表しており、ローマという第四の王国（「あなたの民を略奪する者たち」）を認識しなければ、彼らはその幻を確立することができなかった。ダニエル書11章14節の「あなたの民を略奪する者たち」は、南の王に対して立ち上がり、自らを高め、幻を確立し、そして倒れるはずの者たちであった。ローマはそのすべての特徴を満たした。

第七章では、第四の王国は、それ以前の諸王国とは「異なる」ものとして明確に特定されている。

この後、私は夜の幻のうちに見た。見よ、第四の獣がいた。恐ろしく、恐るべきもので、きわめて強く、大きな鉄の歯を持っていた。それは食い尽くし、打ち砕き、残りをその足で踏みつけた。それはそれ以前のすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。……それから、私は第四の獣の真相を知りたいと思った。すなわち、それは他のすべてと異なり、きわめて恐ろしく、その歯は鉄、その爪は青銅で、食い尽くし、打ち砕き、残りをその足で踏みつけた。また、その頭にあった十本の角と、生え出た別の角、すなわち、その前に三本が倒れ、目があり、大いなることを語る口を持ち、その姿が仲間よりもいっそう逞しく見えたその角について。ダニエル書 7:7、19、20。

ダニエル書七章の第四の王国は、それ以前の王国とは「異なる」と二度にわたって指摘されている。もし九節の「小さな角」が単にシリアの角（アンティオコス・エピファネス）の延長にすぎなかったなら、それは異なるものではなかつたろう。七章でローマに先立つ獣は獅子、熊、豹であり、いずれも自然界に実在する動物だが、鉄の歯と青銅の爪を持つ第四の獣に関しては、その貪り食う恐ろしい獣に該当する自然界の獣をダニエルは知らなかった。つまり、それは異なっていた（異質であった）。九節の「小さな角」は、四つの風と翼によって示される地域の一つから出てきたのであって、角の一つや顕著なもの一つから出たのではない。

ダニエル書8章には、「彼らの王国の末の時期、背きが満ちたとき、いかめしい顔つきをもち、難解な言葉を解する王が立ち上がる」と記されている。「彼らの王国の末の時期」（四つの王国に分裂していたギリシャ）、「背きが満ちたとき」に、新しい王が現れるだろう。

歴史の舞台に登場したすべての国は、見張る者と聖なる者の目的を果たすかどうかが見極められるように、地上でそれぞれの位置を占めることを許されてきた。預言は、世界の大帝国——バビロン、メド・ペルシア、ギリシャ、そしてローマ——の興起と進展をたどってきた。これらの各帝国においても、また力の劣る諸国においても、歴史は繰り返された。それぞれに試練の時期があり、いずれも失敗し、栄光は色あせ、権勢は失われた。『預言者と王』535ページ。

ギリシャの王国の末期（「終わりの時」）に、彼らの猶予期間の杯が満ちたとき（「背く者たちが満ちるに至ったとき」）、「恐ろしい顔つきの王」が現れるだろう。その王は「難解な文言」を理解するだろう。というのも、彼はユダヤ人のヘブライ語や前の王国のギリシャ語とはまったく異なる言語、すなわちラテン語を話すからである。その王国は、西暦66年から70年にかけての包囲をもたらす国として、モーセによって特定されていた。そこでは、とりわけ、飢饉があまりにもひどかったため、ユダヤ人は生き延びるために

自分の子どもを食べた。

あなたは、あらゆるものに満ち足りていながら、喜びと心の楽しみをもって、あなたの神、主に仕えなかったからである。ゆえに、主があなたに差し向ける敵に、飢えと渇きと裸とあらゆる物の欠乏のうちに仕えることになる。彼は鉄のくびきをあなたの首に載せ、ついあなたを滅ぼすまでそうする。主は、地の果てから、鷲が飛ぶがごとく速く、遠くからあなたに向かって一つの国民を連れて来られる。あなたがその言葉を理解しない国民である。顔つきの猛々しい国民で、老人を顧みず、若者を憐れまない。彼は、あなたが滅ぼされるまで、あなたの家畜の産物とあなたの地の産物を食い尽くす。さらに、穀物も、ぶどう酒も、油も、あなたの牛の群れの増えも、羊の群れの増えも、彼はあなたに残さず、ついあなたを滅ぼすまでそうする。彼は、あなたの全地にある、あなたが信頼している高く堅固な城壁が崩れ落ちるまで、あなたのすべての門であなたを包囲する。あなたの神、主があなたに与えられたあなたの全土のすべての門で、彼はあなたを包囲する。そして、包囲と逼迫によって敵があなたを苦しめるとき、あなたは、自分の胎の実、すなわちあなたの神、主があなたに与えられたあなたの息子や娘の肉を食べるようになる。申命記 28:47-53。

ダニエル書第2章では第四の王国が「鉄」で表され、モーセはユダヤ人に「鉄のくびき」を負わせる「ある国民」を指摘した。その「国民」はユダヤ人を「滅ぼし」、それは鷲のように迅速である。鷲はローマの象徴である。その「国民」は「あなたには理解できない言葉」を話し、その言語はユダヤ人には「難解な言葉」となる。それは「顔つきの陰しい国民」であり、ダニエル書第8章に「顔つきの陰しい王」として描写されているとおりである。そしてエルサレムの「包囲戦」において、ユダヤ人は自分たちの「息子と娘」を食べた。

ミラーは、異教ローマこそモーセが予告した勢力であり、ダニエル書2章の第四の「鉄」の王国であり、ヘブライ語でもギリシャ語でもなくラテン語を話した「国民」であると認識していた。ミラーは聖書予言の第四の王国と第五の王国を区別せず、彼にとってそのどちらも単にローマであった。ゆえに、23節で異教ローマが台頭した後も、彼は24節に示される区別を認めなかった。異象の中で、小さな角を指す語は9節から12節にかけて男性形から女性形へ、さらに男性形、そして再び女性形へと揺れ動いていた。23節は異教ローマの預言的特徴を示しているが、24節でのガブリエルの解釈では女性形のローマへと変わる。24節のその権力は「強大な力」を有するとされるが、「しかし彼自身の力によらず、彼は驚くべきほどに滅ぼし、栄え、事を行い、強い者たちと聖なる民を滅ぼす」。

教皇ローマには異教ローマの軍事力が与えられ、538年から1798年までの1260年間、神の民を滅ぼすことになっていた。それは全世界が「驚嘆して従う」獣であるがゆえに、「驚くべき」ほどに滅ぼし、そして、1798年に終わると「定められていた」最初の憤りが成就するまで、「行い栄える」力であった。

そして二十五節では、ガブリエルは、彼がダニエルに解き明かしてきた節々で確立されたその揺れ動く展開に従い、再び異教ローマに言及する。すべての歴史家が証言するように、異教ローマは別種の「政策」によって帝国をまとめ上げたのである。異教ローマの「策略」は、諸国をその拡大する帝国に加わるよう誘い入れることにあり、以前の帝国が単に軍事力によって築かれたのとは異なり、平和と繁栄を約束することで帝国を築いた。

さらに、異教ローマは「君たる者の君」に立ち向かうとも記されており、それはカルバリの十字架にキリストをつけたときに実際に成就した。

それからガブリエルは、ダニエルのために解き明かしていた二つの幻に言及し、「外観」の“mareh”の幻（二千三百日）は真実であり、異教ローマと教皇ローマによる聖所と軍勢の踏みにじりに関する“chazon”の幻は「多くの日のために」（1798年の終わりの時まで）封じておく（封印する）べきであると示した。

それからダニエルはしばらくの間病気になり、その後職務に復帰したが、彼はなお「mareh」の幻、すなわちガブリエルが彼に理解させるよう命じられていたその幻を理解していなかった。そのため、ガブリエルは第九章で再び現れ、ダニエルに「mareh」の幻を理解させるという務めを完遂することになる。

ダニエル書第九章で、ダニエルは預言の言葉を研究しており、モーセとエレミヤの記した書を通して理解するに至った。エレミヤは、彼が置かれていた捕囚が七十年続くことを明らかにしていた。

この全地は荒れ果て、驚きの的となる。これらの諸国民は七十年のあいだバビロンの王に仕える。そして、七十年が満ちたとき、主は言われる。わたしは彼らの不義のゆえにバビロンの王とその国を罰し、カルデヤ人の地を永遠の荒廃とする。エレミヤ書 25章11、12節。

モーセによれば、敵の地での捕囚は、その土地がその安息を享受する時に当たることになる。

そして、わたしはその地を荒廃させる。その中に住むあなたがたの敵は、それを見て驚きあきれだろう。わたしはあなたがたを異邦の民の中に散らし、剣を抜いてあなたがたを追う。あなたがたの地は荒廃し、あなたがたの町々は廢墟となる。そのとき、あなたがたが敵の地にいる間、その地が荒れ果てているかぎり、地は休み、その安息を楽しむ。荒れ果てているかぎり、それは休む。あなたがたがその地に住んでいたとき、安息の時にそれは休まなかったからである。レビ記 26:32-35。

ダニエルは、神の預言のことばから、二人の証人の証言に基づいて、神の民が敵の地に散らされ、その間、その地がその安息を享受することになると理解していた。彼は、エレミヤの七十年に関して、歴代誌の著者が理解していたことを理解していた。

剣を逃れて残った者たちを、彼はバビロンへ連れ去った。彼らは、ペルシャの王国の治世に至るまで、彼とその子らに仕えるしもべであった。これは、主がエレミヤの口を通して語られた言葉が成就し、地がその安息を享受するためであった。地が荒れ果てている間、その地は安息を守り、七十年を満たした。さて、ペルシャの王キュロスの第一年に、主がエレミヤの口を通して語られた御言葉を成就するため、主はペルシャの王キュロスの霊を奮い立たせられた。それで彼は王国全土に布告を出し、またこれを文書にもして、こう言った。「ペルシャの王キュロスはこう言う。天の神である主は、地のすべての王国を私に与え、ユダにあるエルサレムに彼のための家を建てよと私に命じられた。あなたがたのうち、彼の民に属する者はだれでも、その神である主がその者とともにおられるように。さあ、上って行くがよい。」歴代誌下 36:20-23。

ダニエルは、土地がその安息を享受している間、敵の地で七十年間散らされるというエレミヤの言葉が、レビ記二十六章の「七倍」の呪いに基づくものであると理解した。そして彼は、その理解に従って、ついに自らの散らされた状態に目覚めた者たちのために、そこに示されている命じられた手立てを実行した。

そして、あなたがたのうち生き残る者たちに対しては、わたしは敵の地で彼らの心に怯えを送る。揺らぐ葉の音にも追い立てられ、剣から逃げるように逃げ去り、追う者もないのに倒れる。彼らは、追う者もないのに、まるで剣の前にあるかのように互いに倒れ合い、あなたがたは敵の前に立ち向かう力を持たない。あなたがたは異邦人の中で滅び、あなたがたの敵の地はあなたがたを食い尽くす。あなたがたのうち残された者は、敵の地で自分の不義のゆえにやせ衰え、また父祖の不義のゆえにもやせ衰える。もし彼らが自分の不義と、その父祖の不義、すなわち彼らがわたしに対して犯した背きを告白し、また彼らがわたしに逆らって歩んだこと、さらにわたしも彼らに逆らって歩み、彼らを敵の地に連れ入れたことを認め、こうして彼らの無割礼の心が低くされ、自分の不義の罰を受け入れるなら、わたしはヤコブとの契約を思い起こし、イサクとの契約も、アブラハムとの契約も思い起こし、地をも思い起こす。その地はまた彼らに捨てられ、彼らがいなまま荒れ果てている間に、その安息を楽しむ。彼らは自分の不義の罰を受け入れる。というのは、彼らがわたしの裁きを侮り、そのたましいがわたしの掟を忌みきらったからである。しかしそれにもかかわらず、彼らが敵の地にいるときでも、わたしは彼らを捨てず、彼らを忌みきらって全く滅ぼし尽くし、彼らとの契約を破ることはしない。わたしは主、彼らの神である。むしろ、わたしは彼らのために、彼らの先祖との契約を思い起こす。わたしが異邦人の目の前で彼らをエジプトの地から連れ出し、彼らの神となるためであった。わたしは主である。これらは、主がシナイ山でモーセの手によって、ご自身とイスラエルの子らとの間に定められた定めと裁きと律法である。レビ記 26:36-46。

第九章におけるダニエルの祈りは、敵の地に散らされている自分たちに気づいた者たちのための勧告のあらゆる要素に言及している。その祈りは第二章の彼の祈りと照らし合わせて理解されるべきであり、両者は合わせて、『黙示録』第十一章における、ソドムとエジプトと呼ばれるあの大いなる都の通りで死んでいた者たち、すなわち自分たちもまた散らされていたことに気づく者たちの祈りを表している。ダニエルが祈りを締めくくると、ガブリエルが戻ってきて「mareh」と呼ばれる幻を説明する働きを完成させる。これは聖霊が『黙示録』第十一章の二人の証人のために成し遂げようとしていることと同様である。

そして私が語り、祈り、自分の罪と私の民イスラエルの罪を告白し、わが神の聖なる山のために主なるわが神の御前に嘆願をささげている間に、まさに、私が祈りのうちに語っていると、初めの幻で見た人ガブリエルが、速やかに飛んできて、夕の供え物のころに私に触れた。彼は私に悟らせ、私と語って言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを与えるために出て来た。」ダニエル書 9:20-22。

次回の記事でこの研究を続けます。

バビロンが陥落する少し前、ダニエルがこれらの預言を黙想し、時を悟るために神を求めていたとき、諸国の興亡に関する一連の幻が彼に与えられた。ダニエル書第7章に

記されている最初の幻には解き明かしが与えられたが、預言者にはすべてが明らかにされたわけではなかった。「私の思いめぐらしは大いに私を悩ませた。私の顔色は変わった。しかし私はこのことを心に留めていた」と、彼は当時の経験について記している。ダニエル書 7:28.

別の幻によって、将来の出来事にいっそうの光が投げかけられた。そしてこの幻の終わりに、ダニエルは『一人の聖なる者が語り、もう一人の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「この幻はいつまで続くのか」』のを聞いた。ダニエル書8章13節。与えられた答え、『二千三百日、そのとき聖所は清められる』（14節）は、彼を当惑させた。彼は熱心にこの幻の意味を求めた。彼には、エレミヤを通して予告された七十年の捕囚と、神の聖所が清められるまでに経過すべきだと幻の中で天からの来訪者が宣言した二千三百年との関係が理解できなかった。天使ガブリエルは彼に部分的な解き明かしを与えた。しかし預言者が『この幻は…多くの日にわたるものだ』という言葉聞いたとき、彼は気を失った。『私ダニエルは気を失い、幾日かの間病んだ。のちに起き上がって王の務めを果たしたが、私はその幻に驚き、しかしだれもそれを理解しなかった』。26、27節。

なおもイスラエルのために重荷を負って、ダニエルは改めてエレミヤの預言を研究した。それらは実に明白で、あまりに明白だったので、彼は書物に記されたこれらの証言によって、「主の言葉が預言者エレミヤに臨んだ年数、すなわちエルサレムの荒廃が七十年に満ちること」を悟った。ダニエル書9章2節。

預言の確かな言葉に基づく信仰をもって、ダニエルは主に、これらの約束が速やかに成就するよう切に懇願した。彼は神の栄誉が保たれることをも嘆願した。彼の嘆願において、彼は神の御目的に達し得なかった者たちと自らを完全に同一視し、彼らの罪を自分の罪として告白した。『預言者と王たち』553、554頁。